

映画人インタビュー

『おれらの多度祭』

伊藤有紀 映画監督

三重県多度町出身の映画監督としてご活躍中の伊藤有紀さん。シネマ游人にも第7号から寄稿して頂いています。今回、地元のお祭りをテーマに映画を製作されたということで、インタビューを行いました。

編集部

ー今年完成した、伊藤監督の新作についてお聞かせください。

了解です。タイトルは『おれらの多度祭』といって、三重県桑名市多度町の「上げ馬」こと、多度祭を追いかけたドキュメンタリー映画です。

ー新作は、何作目の監督作品になるのですか？

福岡県の古い町並みを撮った『まちや紳士録』、ベテラン落語家を撮った『人情噺の福団治』に続く三作目ですね。ドキュメンタリーにっぽん三部作、というくりにしていて、今後、ドキュメンタリーを作るつもりは基本的にはもうないです。僕の最後のドキュメンタリー映画。

ー制作期間は？

2016〜2019年の四年間、多度祭を追いかけたんだけど、16〜18の三年間を中心に構成してる。編集は18年にいったん終えたんだけど、しっくりこなくて、そこから約一年半寝かせてた。その間に撮影にも入りながらね。で、2019年末〜2020年頭に再編集し、削ったり、新しい場面を加えたり、ナレーションに手を加えたりして、60分の完成形に落ち着いた。



―すでに映画祭への出品も決まったそうですね。

はい。スペインのマドリッド・インディー・フィルムフェスティバルの中編部門と、大阪の門真国際映画祭のドキュメンタリー部門にノミネートされてる。マドリッドの映画祭は、長編部門に日本の劇映画『山中静夫氏の尊厳死』（主演・中村梅雀）もノミネートされて、部門は違えど海外の同じ映画祭で、超低予算のドキュメンタリー映画と有名俳優出演の劇映画が肩を並べるといえるのは、うれしかったね。

―今後の展望は？

『おれらの多度祭』は他にもいくつかの映画祭にエントリーしていて、今年はその線で展開していく。その中で出会いを大切にしていきたいね。劇場公開は来年かな。でもうドキュメンタリーは作らないとさっき言ったけど、次は劇映画。常に映画にしたい企画や脚本の二つ三つは懐にしのばせて、劇映画への機運を高めていきたいね。

―ありがとうございます。
―こちらこそ。

【監督プロフィール】

伊藤 有紀(いとう ゆうき)

映画監督。1979年、三重県多度町生まれ。日本大学芸術学部映画学科卒業。映画・ドラマのスタッフを経てテレビのディレクターになり、旅番組で日本一周をする。そのロケが縁で、2009年に東京から福岡県に移住。監督作品『まちや紳士録』（2013）『人情噺の福団治』（2016）は全国各地のミニシアターで劇場公開。続く『ドキュメンタリーにつぼん三部作』の三作目『おれらの多度祭』が今年完成し、来年の劇場公開を予定している。